

第4回 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定委員会 議事録

- ・日 時 令和3年8月26日(木曜日)午後6時30分～8時30分
- ・場 所 武蔵野市役所 111会議室
- ・出席者 朝岡委員長、見城委員、千種委員、町田委員、森副委員長、渡邊委員、市川委員、北川委員、小島委員(名簿順、敬称略)(見城委員、渡邊委員、市川委員、北川委員はオンライン参加)
- ・傍聴者 1名

1 開会

【委員長】ただ今より、第4回第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定委員会を開催します。

【事務局】配布資料の確認

- ・資料1 武蔵野市市民活動団体実態調査結果報告書
- ・資料2 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画《中間のまとめ—第二期計画の骨子概要》(案)
- ・資料3 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定に係る論点(たたき台)
- ・参考資料 計画骨子に係る検討項目の整理表

2 議事

(1) アンケート調査結果報告について

【委員長】前回配布された結果報告書は速報版であり、今回は最終結果報告書となりますので、一部修正等があるかもしれません。

また、前回の引き続きとなるため、本日は6つの柱立てのうちの項目3以降を中心に議論していただきたいと思います。

それでは、事務局から、前回議論された項目1と2について、速報版からの変更があればご報告ください。

【事務局】(資料1の項目1、2の速報版からの変更点について説明)

【E委員】市民活動の「市民」とは誰を指すのかということにもつながることですが、アンケートに答えてくださっているのは高齢の方が中心で何か活動をされているようです。仕事をしているため日中はできないが、週末や空いている時間にボランティアをしたいという方の問い合わせがここ数年増えてきています。何年か前に大雪が降った時、平日の昼間、武蔵野市民として残っているのは高齢者ばかりで雪かきが大変でした。しかし、市内には市民以外の学生や働いている方が結構おり、職場としては何か手伝いたいという希望はあるようです。市民活動を推進する上での課題として、担い手の不足や高齢化があげられていますが、平日の日中市内にいる市民以外の方が関わられるような仕組みをつくれれば、マッチングができるかもしれません。団体としてではなくても、ピンポイントで手伝いたいという人はおり、特に社会人が増えてきたように思います。

資金不足の課題については、お金を必要としない手助けを得られたり、場所がない課題については、オンラインが使える集まる場所を必要としなかったりと、それぞれの課題を別の切り口から解決する方法があるのではないのでしょうか。このように、大きなことをしなくても課題ごとにマッチングさせるかたちができると思います。

【委員長】アンケート結果は計画をつくるための材料です。柱の項目1、2のネックになっていることは、団体の担い手の高齢化や資金不足・担い手不足で、これらをどう解決するかがポイントです。団体に組織されていなくてもいつでもボランティアに参加していただける人がたくさんいます。平日の昼間は働いているため夜や週末ならば可能な限り協力できる社会人ボランティアや、大学生を中心とした高校生や中学生などの休日には地域の活動に関わりたいと思っている学生たちです。彼らは団体としては組織化しにくいですが、課題ごとに誰かがマッチングしてくれればいいのではないかとということです。学生たちは、いつどこで集まるようにとSNSで発信す

るとそれなりに集まるようです。そのように、課題ごとに声かけをし、打ち合わせもオンラインで行うといったフレキシブルな枠組みの中で地域や団体の活動を進めていく方法もあるのではないのでしょうか。問題は、マッチングをする主体がどこにあるかということです。コロナの影響でオンラインが進んできていることも視野に入れると、実は新しい市民活動の担い手が存在し、彼らをどのようにうまく位置づけ活動を進めていくのかという提起だと思います。

それでは、事務局から項目3以降の説明を1項目ずつお願いします。

【事務局】（資料1の項目3について説明）

【B委員】タブレットを持っていますがわからないことが結構あり、高齢者は若い人の力を借りないと使えない人が多く、熱心に取り組む熱量もありません。若い人たちに入ってもらい、窓口を開き、手伝って補ってもらうことにより、団体の活動を促進していくという方向性もあるのではないかと思います。そういった分野の進歩は早く、我々の子どもの世代よりもさらに孫の世代のほうがよくわかっているようです。

【F委員】ICTの活用については、高齢者は使用していこうという意欲がそれほどないかもしれませんが、それは、アンケート対象の団体の多くは自身のエリアのコミュニティセンター等で活動していることが多く、直接会って話せば十分である状況で、ICTを使って何かをしようということは少ないからだと思われそうです。しかし、アンケート対象外の団体の中には、エリア内だけではなくエリアを超えた所でつながっている団体も多く、発信方法も違います。高齢者を中心とする団体にICTを活用することを強要するのではなく、ICTを活用している人たちをどのように武蔵野市の市民団体として育てていくかということのほうが大事ではないのでしょうか。

【委員長】調査結果の報告にもありましたが、高齢者は機械を持っていないわけではないが使い方が不十分で使いこなしていないという問題があるということです。一般的な使い方の講座とは別に、困った時に直接教えてもらえれば皆が使えるようになり、個別のサポートが大事であるためいい方法はないだろうかというご意見でした。高齢者でも必要に迫られて使えるようになった人もおり、年齢には関係なく、できる人ができない人に教えるべきだと思います。

逆に、皆が使う必要があるのかというご意見もありました。使わなくても活動できる団体にはその方たちのやり方も尊重することが必要であるということです。

使いたい人は使えるようにし、使う必要のない人は別途サポートしていくという考え方でいいのかもしれない。

【G委員】このところ、コロナ等の関係でオンラインシステムを利用した高齢者の意見をいただくことが多かったのですが、高齢者は情報を見に行くことはできても、相互のやり取りは難しいようです。知りたいことがピンポイントでわかってくると、教え合うこともスムーズにいくのではないかと思います。

【委員長】アンケート結果とは別に、柱立ての方向性として問題提起したいことが1点あります。高齢者も機械は持っているのだから使おうと思えば使え、また使わなくてもいい人たちもいるということを考えた時、これはワクチン接種と同じかもしれないと思いました。世の中は使うことを前提に色々なサービスが急速に組み立てられています。市役所でも申請や手続きはオンラインでするようになり、市役所には来る必要がなくなるかもしれません。そういう世の中になった時に、高齢者も含め市役所に来なくてもできる人を少しでも増やしていくようにするために、「情報・ICT等の活用について」考えればいいのかではないのでしょうか。機械を持っているのであれば、使いこなせるように手伝ってあげればいいのかと思います。困った時に連絡すれば登録されている人が説明してあげ、オンラインで説明することが難しければどこかの場所を用いて教えてあげればいいのかではないのでしょうか。中高年の人たちを情報・ICT機器から排除するのではなく、どうにかして使用できる人を増やしていくという考え方も1つの方法であると思います。もちろん、使いたくない人の意向も尊重しなければなりません。使ったほうがはるかに便利になることは確かです。これからは災害情報もこのようなかたちで流れてくることは確かですので、そう

いったことも意識しながら市民活動促進の中にも位置付けていったらいいのではないのでしょうか。基調としては、すべての人がICT機器を使えるような環境をつくっていくためにはどのような仕組みをつくれればいいのかということを考え進めていこうということだと思います。

それでは、事務局から項目4の説明をお願いします。

【事務局】（資料1の項目4について説明）

【委員長】4ページの概要の下の四角い括弧の中に記載されていることで、かなり説明がなされていると思われます。連携・協働のメリットはあってもそれに伴う負担とのバランスが問題となっており、どのようなメリットがあるのかを団体が具体的にわからなければなかなか踏み出せません。コミュニティ協議会やボラセン登録団体にはもっと連携したいというニーズはあるため、負担をできるだけ増やさないようなかたちで、どのように連携をつくり上げていくことができるかが課題です。これを誰がやるのか、どのようにやるのか、簡単なことではありませんが、そういった課題がわかったということです。

それでは、事務局から項目5の説明をお願いします。

【事務局】（資料1の項目5について説明）

【F委員】武蔵野プレイスの満足度の項目として「市民活動フロアだより・団体イベント情報への投稿」がありますが、掲載していただくためには半年くらい前には提出しなければならず、その割には掲載できる分量も多くありません。市民社会福祉協議会の広報誌「ふれあい」やプレイスの「市民活動フロアだより」等を連携させることはできないでしょうか。ネットが使える人たちはホームページから詳しい情報を得ることができますが、紙媒体を頼りにしている人たちに対する情報量が少な過ぎると思います。また、連携していないためにそれぞれの紙媒体を持ってこないと情報を得ることができません。市報のように「市民活動だより」というようなかたちで、市民社会福祉協議会やプレイスの登録団体そしてコミュニティセンターの情報といった市民活動に関わる情報を集めて掲載すれば、もっとたくさんの人の手に取ってもらえ、情報を掲載したい団体が積極的に出てくるようになるのではないのでしょうか。市民社会福祉協議会やプレイス等のノウハウのある方々に助けていただきながら、コミュニティセンターの広報担当者も参加して、皆でつくり上げるようなイメージです。紙媒体をうまく利用し、広報の連携や市民活動の連携ができないかと考えます。

【委員長】オンライン情報は連携しやすいですが、紙媒体についてはおそらく各団体が予算を縦割りを持っているため、情報共有をして合冊で発行することを難しくしていると思います。行政や組織の縦割りがそのまま情報の縦割りとなっています。市報は縦割りとは関係なくすべて載っていますので、1つを見ればすべての情報が得られるような紙媒体の情報連携が必要であるという大事なご指摘です。予算が縦割りに付いていることをどうするかという問題がありますが、そのほうが合理的であることを確認していただければなんとかなると思います。

【B委員】市民社会福祉協議会の広報誌「ふれあい」は新聞折り込みで配布しています。年間予算は680万円くらいで、第二の市報として用いることを考えています。市報には枠がありますが、「ふれあい」ではNPO法人の紹介や市民活動の紹介等を行っています。市民社会福祉協議会の2階にある福祉公社でも「羅針盤」という情報誌を出しており、いろいろな団体がそれぞれ発行していますが、全戸配布ではありません。予算の付け方をどうするかはわかりませんが、各団体が「ふれあい」の中でページを決めて情報を出していくといった使い方は考える価値があると思います。

【委員長】どのようにやるかはこれから工夫するとして、少なくとも市民社会福祉協議会の「ふれあい」がかなり効果があると思われますので、武蔵野プレイスの「市民活動フロアだより」の団体イベント情報を入れ込んでいく方法を考えればいわけで、1つの可能性のあるご提案です。紙媒体については他にもいろいろな可能性があると思いますので、柱立ての議論の際に検討した

と思います。

【A委員】武蔵野プレイスにおける満足度で「情報ステーションへの投稿」が低いようですが、情報ステーションとは具体的にはどのようなものですか。

【D委員】武蔵野プレイスのホームページの中の「市民活動支援機能」の奥深くに情報ステーションはあります。投稿がしにくいということで、現在見直しを図っています。キーワードの入力によりグループや登録団体を検索する機能を持たせています。

【A委員】情報やICT等の活用と関連し、まさにこれから市民活動を推進していくために求められている情報提供の1つのモデルケースにもなりうると思います。それがうまく活用されていないのは、わかりにくい場所に置かれていることと、投稿しにくいということであると思われますが、どうですか。

【D委員】要因は2つあると思っています。まず1つ目は、投稿された内容は職員が打ち直しているため時間差が生じてしまうということです。また2つ目は、情報ステーションの使用方法についてコロナの前に何団体かが集まり説明したのですが、団体の代表が変わった時などに伝達されなかったりしたことが考えられます。

【A委員】潜在的には、市民活動の活性化に役立ちうるような機能であると思います。しかし、利用するにはおそらく何らかのハードルの高さがあると思われ、それをどのように下げているかが武蔵野プレイスの課題でもあり、市民活動促進基本計画全体に関わる課題となっているのではないのでしょうか。

【委員長】これはオンライン上での情報提供ということですが、フィルターをかけることを考えていますか。投稿は打ち直して掲載しているとのことですが、様式に合わせて入力してもらい打ち直さずにそのまま掲載するのが簡単です。しかし、その場合には内容の精査ができず、問題がある発信があった場合にどうするのかという問題がありますが、打ち直すことによりフィルターをかけているのではないですか。発信されたものは機械的にすべて掲載しているのですか。

【D委員】文化事業団との合併に向けて1つの柱となるのがホームページの見直しということで、市民活動のページをどのように活用していくか、すべての市民活動に対して情報ステーションが広がるような仕組みを考えていますが、セキュリティの面が外せませんので、業者とやり取りする予定です。

【委員長】計画の策定時に議論することになると思いますが、情報セキュリティとは違う次元で、情報の発信権限を誰が持つかということが問題です。行政が関わる情報発信の場合は、市民や団体が直接掲載することができないのが原則で、チェックされ認められたものだけが掲載されます。それを当たり前としてやってきていますが、逆にそれが1つのハードルとなっており、市民の自由な発信をワンクッション置いて制限することになっているのかもしれない。ウィルスや情報漏洩とは別に、発信の自由が制限されてもいいのかということです。リスクは伴いますが、登録した人は自由に発信できる場を用意し、発信後問題があった場合にはすぐに削除や訂正を行うということにすれば、発信の自由度は高まるため多くの情報が出てくるのではないかと思います。公共の掲示板となるはずで、武蔵野プレイスを使ってそういったことはできないのでしょうか。先にフィルターをかけるのではなく後でチェックするという方法です。そして発信者は限定しなければならず、発信する団体や個人は定期的に研修を受けなければならないかもしれません。そういったことを検討できないのでしょうか。

【D委員】まさにそのようなことを検討していました。パスワードやIDなど任せるところをどうすべきか、フィルターをかけるか、などを検討しているところです。

【副委員長】情報投稿の利用経験率や満足度が低くなっているとのことですが、武蔵野プレイスはいろいろな機能を持っているため、すべてを網羅することは難しい部分もあるのではないかと思います。今後市民活動の連携・協働やコーディネート機能が話題になっていった時、市内で熱心にやっている団体や個人にコーディネーター役を付加するような方法を取ることはできないのでしょうか。行政と外郭団体との橋渡しや、民間団体どうしの橋渡し、行政や民間団体との橋渡し

等の連携を、人を使つてつないでいくといった支援があってもいいのではないかと思います。

【委員長】武蔵野プレイスの「場所」というよりも「スタッフ」が持っている機能として、コーディネート機能を意識して進めていけるのではないかとありますが、プレイスの今後の展開のあり方としてコーディネート機能の中身も考えねばならないと思います。武蔵野プレイスの役割は、今までは人を集めてスタッフがコーディネートをしたり市民が活動したりするといった「集まる場」として位置付けられていました。今後もそれは必要ですが、その一方で「発信拠点」としてプレイスが機能する可能性はないでしょうか。発信する側はプレイスに来たとしても、受け取る側は来る必要はありません。SNS等で発信し、プレイスの外側に情報の受け手がいて、そこからいろいろな活動が広がっていけばいいという考え方もあります。そのためには、プレイスのスタッフ自身のコーディネート機能が、対面で行うだけではなく、市民や団体の情報発信のフォローをきちんとでき、すり合わせをすることができるようにならなければなりません。先に出た「課題ごとのマッチング」も、ボランティア希望の人が皆で集まり話をする必要はなく、必要なコーディネート（マッチング）を誰かが行えば人が集まり活動は進むと思います。そのような場所としてプレイスに期待できないかという、プレイスの新しい役割の提案だと思います。

それでは、事務局から項目6の説明をお願いします。

【事務局】（資料1の項目6について説明）

【E委員】公共図書館も何年か前から箱がある意味を問われており、わざわざ行く意味としては課題解決型図書館としてレファレンス機能を高めています。必要な方が来館し、資料や情報とつなげる提案をし、直接マッチングしなくても解決するための情報を案内する役割を果たしています。武蔵野市プレイスについても、課題を解決するために、直接人を介したほうが良い人と、介さないほうが良い人がいますが、その場所に行く意味の1つとして「相談しやすい環境」があるのではないかと思います。私たちはすべてをマッチングすることはできないため、同じような課題をレファレンスとして積み上げています。それはオープンにしているものもありますが、していないものもあります。1つの課題は個別であることもあるが、積み上げて一定量の課題としてつないでいき、見えるような形にしていくこと、そのために人を育て連携していくというのでもできると思います。わざわざ武蔵野市プレイスに行く意味という視点では、敷居が低い関係性ができるとよいと思います。明確な課題、疑問を持っていないと行ってはいけない、というようなハードルがあるのかもしれませんが、関係性ができていけば、それがなくなるのではないのでしょうか。

活動場所がない、という問題もありますが、今は一人でやってみたいという人が多い印象があり、信頼できる情報や人と「出会える場所」に大きな意味があると思います。人と出会ったり、つながったりできるような意味を場所に持たせられれば、例えば苦手な人には、どういう方向につながるツールがあるのか、など活用できると思います。いずれにしても同じような課題を共有している人がいるのであれば、その課題を積み上げて、困った時はこういう事例があるということが見えるようになってくると、自分の課題について、解決方法が見つかり、今行っている中でも形を変えてできるようになるのではないのでしょうか。

【委員長】図書館には司書という専門職がおり、司書の専門性としては本に関するレファレンス機能があります。図書館に行って司書に相談するということは今ではほとんどないようですが、自身が何を探しているのか、何を調べたいのかは司書に直接相談すればいいのです。司書はそこにはない本も含めて世界中の本を紹介してくれ、場合によっては取り寄せてくれたりします。そういった機能が図書館にはあり、そのレファレンス機能を市民活動そして地域や個人の課題解決に使えないか、つまり市民活動や課題解決のためのレファレンス機能を武蔵野プレイスのスタッフに期待することはできないかという提言だと思います。図書館でできるのは書籍を中心にしたことですので、直接課題を解決することまではいきませんが、プレイスをレファレンス機能という視点で見た場合どのように考えられますか。

【D委員】今、皆で交流できる伝言板をラウンジにつくってみようとして協議しているところです。情報ステーションの役割の見直しということもありますが、それと同時に、現場に来たら他の団体の伝言を見ることができるようになるようにしようということを検討しています。コミュニティ協議会からも同じような話が出ており、窓口ではなかなか声をかけられない、ラウンジを利用する人も、窓口には近づくことができない人もいるようなので紙に書いて渡してもらおうようなことを行ってみる予定です。また、コーディネートに関するデータベースは職員が持っており、どのような事例に対してどのように対処したかがデータベース化されています。新しく採用された職員にはこのデータベースを見ながら研修で伝えるようにしており、マニュアルのような形で残していますが、表に出したことはありませんでした。それを表に出していくのも1つの方法かもしれません。

【E委員】カウンター越しの距離感というのは思ったよりもあるのではないかと思います。特に質問がなくても挨拶をしたらいいのではないのでしょうか。ハードルが高いと思っている方も、日常的な会話ができれば、話しているだけで課題が解決することもありますので、ただ「はい」とだけ返事をするのではなく、日常的に寄り添える関係ができるといいと思います。

【委員長】もう少し丁寧にすり合わせれば良いアイデアが生まれてくると思います。武蔵野プレイスのスタッフは非常に頑張っておられ、今持っているビジョンをそのまま発展させていけば良いものになると思います。気になっていることが2つあります。

1点目は、多摩地区には武蔵野市以外に公民館がたくさんあり、公民館のモデルを多摩地区がつくったのですが、今から50年くらい前に「公民館3階建論」というものがありました。公民館は3つの機能を持たなければならず、その1階は目的を持たずに入れるロビーとなるというものです。そこでは誰でも自由にすることができ、受付に行って質問することはハードルが高いですが、スタッフが自然に働きかけてつながっていくといいのではないかとこの考え方でした。プレイスにもそういったロビー的な役割とスタッフの考え方があるのでしょうか。

2点目は、プレイスに来なくてもスタッフとつながり、いろいろな相談をしたり紹介してもらったり、場合によっては仲間集めができるようにサポートしてもらったりすることはできないかということです。これだけオンラインが発達してきたので、来る人だけを対象とするのではなく、オンライン上でアクセスする人たちにも対応できないのでしょうか。

【D委員】実はちょうど青少年活動支援でも同じような話を考えているところです。以前は、青少年の居場所として、子どもたちがふらっと来て食事もできる場所だったのですが、今では勉強しかできない場所になってしまったため、勉強ができる子しか来ません。居場所がなくてふらっと来ていた子は、今どこに行ってしまったのでしょうか。「いつでも声を聞くよ」と言うことができないかを青少年活動支援で検討しています。アンケートでプレイスの問題点として「アクセス等が不便」ということが挙げられていたため、オンライン上で話を聞くような場を持たなければならないと課題認識しました。

【委員長】武蔵野プレイスだけではなく、全般的に市民活動支援と言った場合、特定の時間に特定の場所に人を集めてコーディネートしたり発信したりして活動を進めるといった支援のあり方が一般的でしたが、場所や時間を限定せずに支援する方法はないかと考えられてきました。そうすることにより、課題ごとの担い手のマッチング等はかなりやりやすくなることははっきりしています。そういった考え方で市民活動支援を再度見直してみてもどうかということです。

【F委員】武蔵野プレイスとコミュニティセンターとの関係性についてですが、市民活動の促進ということではプレイスとコミュニティセンターはかなり違うと思います。市民活動を行っている人はプレイスには地理的に行きづらいこともあり、プレイスを利用する人とコミュニティセンターを利用する人は東西に分かれ、結構違うのではないかと感じています。コロナ禍において、中学生や高校生などの若者はプレイスに行けない時にコミュニティセンターでWi-Fiが使えるればそちらに行くと思います。今は、プレイスに行かないとプレイスの情報提供は受けられませんが、武蔵野市プレイスがある意味、市民活動のハブのような形で、コミュニティセンターともオンラインを使って連携できるような情報を得られる仕組みがあるといいと思います。そのうえで、オ

ンラインでそれぞれの情報共有ができ、プレイスからもコミュニティセンターの情報を、コミュニティセンターからもプレイスの情報を発信できるようなど、相互に連携できるといいと思います。

【委員長】武蔵野プレイスとコミュニティセンターがどのように連携していくのかという問題がありますが、子どもに限らず市民の居場所としてたくさんのコミュニティセンターがあるので、それらをオンライン等でつなぎ、プレイスで活動支援していくという方法があるのではないかと思います。実際に、学校の教科書は紙ではなくなり、次回の教科書改訂ではタブレットで配信すると文部科学省は言っています。紙媒体も用意するそうですが、タブレットのほうが使いやすいです。ただ、子どもたちの家庭内でWi-Fiがどの程度使えるかという問題があり、教育環境の格差が生まれてきます。それに対し、地域の中にWi-Fiを自由に使える場が必要であり、武蔵野市の場合ではそれがコミュニティセンターで、他の地域では公民館や図書館等いろいろな場所が考えられます。そしてWi-Fiを入れるだけではなく、それを通して学習支援も受けられる可能性もあるのではないのでしょうか。プレイス単独ではなく、コミュニティセンター等の他の施設や団体とつながり、地域全体でフォローする体制も市民活動支援の新しい方法として検討していただきたいと思います。

アンケート調査そのものは、調査結果を分析することが目的ではなく、結果を踏まえて計画づくりに活かすということです。計画の柱を検討する際に引き続き議論していただければいいと思います。

(2) 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定に係る論点について

【委員長】第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定に係る論点について、事務局より説明をお願いします。

【事務局】（資料2、3、参考資料について説明）

【事務局】本日は時間の都合で議論を続けることは難しいため、次回引き続き行うことといたします。

【委員長】資料2の第二期計画の第3章についてアンケート結果を基に本日議論しました。皆さんの意見を調査結果のまとめに反映させるだけではなく、事前に皆さんから聞き取りをした内容も含め、第3章に反映したいと考えています。資料3と参考資料が第4章にあたる部分で、次回以降議論していただく予定です。そのたたき台となるのが資料3で、論点の1から6について論点ごとに意見をお聞きし、合わせて他にも論点があるのではないかなどのご意見もうかがいたいと思います。

(3) その他

3 事務連絡

【事務局】日程調整をいたします。

第5回 9月28日（火）18：30～

第6回 10月27日（水）18：30～

第7回 11月12日（金）18：30～

新型コロナウイルス感染症の状況がどうなるかわかりませんが、次回以降も今回と同じような開催形式になるかと思われます。

4 閉会

【委員長】それでは、閉会したいと思います。お疲れ様でした。

以上